奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

令和二年十月度　入選句（投稿総数四千百八十四句・一般投句数六百三十八句）

選者　大西　誠一

特選

身に入むや翁遺憾の辞世の句　兵庫県神戸市　岸下　庄二

芭蕉は生涯で四つの紀行文を書いた。その中で一番の大作が「奥の細道」である。大垣はその結の地である。元禄二年三月二十七日深川を出発し、九月六日に大垣に着いた。百五十日間の紀行文である。「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」が有名であるが、芭蕉は元禄七年十月十二日に大阪で亡くなった。辞世の句は「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」である。今の世であれば平均寿命八十一才であるので、まだまだ良い句を残されたと思う。非常に残念である。

晩学の辞書の重たさ秋灯し　大垣市　中山　あや子

現在は電子辞書など便利なものがあるが、晩学の人にとっては、若き日には感じなかった辞書の重さがよく理解できる。誰もがもっと勉強しておけば良かったとほんとうに思う。又季語の「秋灯し」が非常に良い。やはり勉学は昔から秋である。

蜩の声ふと止みし汀女の忌　不破郡垂井町　西田　厚堂

女流作家4Tの中で一番私の好きな俳人である。
忌日は九月二十日、代表句は「外にも出よ触るるばかりに春の月」子供に対する愛情がこれ程迄に出ている句は他に無い。
作者は蜩の鳴き終えた時にふと汀女の忌日である事に気付いたのかもしれない。

秀逸

鰯雲や万能竿は父譲り　香川県高松市　西　教子

卓袱台の女三人青みかん　神奈川県川崎市　立野　音思

家計簿に今日も猛暑と書き留めり　安八郡神戸町　高橋　日出美

散財やゴーツーイート秋会席　岡山県岡山市　さとう　くにお

水見舞いコロナ見舞や虫時雨　東京都北区　菱沼　多美子

余生にもときめき少し天の川　大垣市　今津　絹代

子規愛でし松山寿司の秋彼岸　愛知県瀬戸市　宮崎　諭志

今生を生き切つたか蝉の殻　本巣市　堀部　美智子

松手入れされて聳える廓城かな　大垣市　樋口　絹子

とろろ汁使ひ慣れたる夫婦箸　大垣市　髙木　歌佐

入選

釣る人のじっと動かぬ麦藁帽　滋賀県甲賀市　甲賀　忍者

想ひ出の古関マーチや十月来　愛知県豊田市　城山　悠水

霧襖破り一番電車来ぬ　岐阜市　辻　雅風

月光に身をおき月の人ならん　神奈川県横浜市　龍野　ひろし

色の無き風や風力発電機　大垣市　伊藤　英司

露草の瑠璃色しずく光る朝　安八郡神戸町　早津　郁男

秋の夜や会話途絶へて箸を置く　東京都世田谷区　関戸　信治

敬老日栗入り赤飯おすそ分け　安八郡神戸町　北村　咲子

飲み干して片目で覗くラムネ玉　愛知県額田郡　平松　京師

秋蝶の一頭のみの訪問者　神奈川県大和市　岩田　爾瑠

入選

便せんを秋付く季語で埋め尽くし　本巣郡北方町　林　明夫

ジャズ聴くや一人静かに夏の果て　大垣市　在間　琇子

どっと来てぱっと飛び立つ稲雀　大垣市　森川　きよ子

所在なく厨に一人雨の月　大垣市　田中　雅子

芒活け笙を奏でる僧ふたり　大垣市　早苫　千恵子

「くちなしの花」口ずさむ星月夜　不破郡垂井町　竹嶋　富美子

鹿除けの貴船菊また食はれけり　大垣市　小林　研

着飾りて百歳の紅敬老日　大垣市　早崎　美弥子

吾に末だ残る純情月見草　不破郡垂井町　髙木　紫雲

新走水都の誇る木枡にて　養老郡養老町　田中　紫香

選者吟

惑星の一つに生まれ良夜なる　誠一